

拙著『マルクスの経済理論  
——MEGA 版『資本論』の可能性』  
に対する土井日出夫氏の書評  
へのリプライ

宮田 惟史

---

## 1 本書の特徴

『大原社会問題研究所雑誌第 788 号（2024 年 6 月）』において、土井日出夫氏（横浜国立大学名誉教授）に拙著の書評をご執筆いただいた。まずは本書を要約しコメントを寄せてくださった土井氏、ならびにリプライの機会を与えてくださった編集委員会にお礼申し上げます。

拙著は、MEGA にもとづき、マルクスの経済理論の究明を目指した書である。周知のように、現行版『資本論』の第 2 部と第 3 部は、エンゲルスが編集したものであり、原文に無数といえるほどの文章の変更や削除、移動等がほどこされている。それは章や節の区切り、表題の書き換えにまでおよぶ。それゆえこれまで、マルクス本人の考え方の全体を必ずしも正確に捉えることができなかつた。ところが昨今、『資本論』分野にかんするすべてのテキスト＝MEGA 第 II 部門（全 15 巻／全 23 分冊）が刊行された。いまやマルクス自身の原文を読むことができる。こうしたなかで拙著は、MEGA 第 II 部門の『資本論』および関連草稿群を土台に、後期・晩期を含め、そこでの資本主義分析をできるかぎりトータルにつかみ、その意義を引き出そうとするとところに大きな特徴をも

つ。そこには、『資本論』第 1 部のみならず、MEGA 版『資本論』第 2 部の資本の流通過程・再生産論や、第 3 部の利潤率の傾向的低下法則、信用や恐慌、さらには現代資本主義やアংশエーションの考察も含まれる。拙著では、各論とともに全体を包括するアプローチから、マルクスの経済理論の軸をあらためて浮上させることを試みた。

このような広域を扱う特徴からも、さまざまな角度からの批判が可能だろう。以下では、評者からいただいたご批判に紙幅の許される範囲でお答えしたい。なおそのさい、一部に若干厳しい表現が含まれるが、評者への敬意の念があることを断っておきたい。

## 2 評者のコメントに対するリプライ

(1) 「古典派労働価値説の枠組みを意識的に排除している」という批判について

第一に評者は、拙著の「構造的欠陥」として、「マルクスが古典派経済学から肯定的に継承した枠組みの意識的排除」があると批判される。だが、このような批判は適切とはいいがたい。筆者はそもそも、「古典派経済学から肯定的に継承した枠組みの意識的排除」などまったく行っていない。とくに評者は、筆者が拙著第 3 章の貨幣数量説批判で、リカードの「投下労働価値説」を「排除」しており、「リカードに対して、あまりにも不当な評価」が行われていると批判している。だが、筆者はリカードの積極的な理論的側面を「排除」していないばかりか、むしろ、そのなかに肯定的な内容が含まれていることを度々指摘している。たとえば筆者は、「リカードには価値論があり、金属貨幣を商品の無価値な代表物とみなしたヒュームとは異なる」（81 頁）、「いわゆる効用価値論に立つセーとは違い、リカードは労働価値論、蓄積論、利潤論など独自の理論をもっている」（64

頁), 「リカードもセーと同様に, 貨幣の本質的な分析を欠き——セーとは根本的に異なり, リカードには労働価値論があるものの」(68頁)などと注意を促し, リカードの経済学は, 貨幣数量説やセー法則に立ちながらも, 他の論者とは異なる価値論など積極的な理論が内包されていることを述べている。主題から外れるので, リカードの労働価値説を展開してはいないが, 「排除」どころか, マルクスが古典派経済学の一部の側面を継承していることは当然に承知している。拙著では, 肯定的な内容をもちながらも, 古典派経済学が克服できなかった問題を, マルクスが批判的に乗り越えたところに焦点をあてているという点をご理解いただきたい。

## (2) 「生産資本循環の枠組みを排除している」という批判について

第二に評者は, 拙著では「生産資本 (P) 概念の排除」が行われていると批判される。だが, これも適切とはいえない。筆者は, 「生産資本概念の排除」など一度も行っていない。このような批判は, 評者がマルクスによる生産資本の基礎概念を誤認していることから生じている。拙著で生産資本について述べている箇所を引用しながら, 評者は, 「 $G - W$  の  $W$  は, たんなる商品ではなく, 資本の生産過程を開始するための生産諸要素  $A + P_m$  (労働力+生産手段), すなわち「生産資本」(156頁)とあるように,  $W$  のことであって  $P$  のことではない」(土井書評 57 頁/下線は筆者)と述べ, これを根拠に, 筆者が生産資本  $P$  の概念を「排除」しているという。評者による拙著からの引用は部分的で誤解を招くが, ここで筆者は, 孤立的に  $G - W$  を取り出すのではなく, 資本循環の視角から捉えると,  $G - W$  の「 $W$ 」は「たんなる商品ではなく」, 「資本の生産過程を開始するための生産諸要素  $A + P_m$  (労働力+生産

手段)」であり, それは「生産資本」という規定性を受け取るのだと述べている。これをどうしたら, 「 $W$  のことであって  $P$  のことではない」と読み取ることができるのだろうか。マルクスにもとづくと, 生産資本 ( $P$ ) とは, 無内容な「たんなる商品」ではないものの, 生産過程で価値増殖すべき生産諸要素として購入された商品である。つまり, 資本循環の観点からみれば, 貨幣資本  $G$  によって買われた  $W$  は, 生産過程で生産諸要素として機能する生産資本  $P$  と一致する。資本循環においては,  $G - W$  の  $W$  は生産資本  $P$  と一致することから,  $W \cdots W$  循環は意味をもたないのである。だからこそマルクスは, 第2部第1稿で当初,  $W' \cdots W'$  循環と区別される  $W \cdots W$  循環を含む四つの循環を考えていたものの, 第1稿の執筆中に  $W \cdots W$  循環を破棄し,  $W \cdots W$  循環を  $P \cdots P$  循環に解消し, 三循環を確定した (MEGA II/4.1, S. 190) のである。評者は商品 ( $W$ ) と生産資本 ( $P$ ) との区別と関連を, したがってまた生産資本の基本概念を誤認しているため, 筆者が「生産資本循環の枠組みを排除している」という誤解にいたったのだろう。なお評者は, 「生産資本概念の排除」は所有基礎論批判にも影響を及ぼしているというが, 生産資本概念の誤認にもとづいた「批判」であり適切とはいえない。

## (3) 「基礎理論と政策論の一体性の枠組みの排除」という批判について

第三に評者は, 「マルクスの経済学批判体系プラン」は「基礎理論にあたる「資本, 賃労働, 土地所有」と政策論にあたる「国家, 外国貿易, 世界市場-恐慌」の「一体性」から成り立っているとしたうえで, 筆者が「基礎理論と政策論の一体性の枠組みを排除」していると批判する。これについては, 「プラン」が「基

礎理論」と「政策論」の二つの部分から成り立ち、それが『資本論』体系にも継承されているかのように考えている評者の理解がそもそも誤っているといわざるをえない。これは評者が、かつての「プラン」と、MEGA から新たに得られた『資本論』の研究領域との区別を明確に踏まえていないことから生じている。ここでは紙幅の制限から立ち入れないが、『経済学批判要綱』での6部作プラン（資本・土地所有・賃労働・国家・外国貿易・世界市場）を決定的に変更し、『資本論』では、「資本一般」とは区別される、「資本の一般的研究・分析」を行うというかたちで体系が刷新されたことを正確に捉える必要がある。拙著では、第1章「1.3『資本論』の研究領域——「資本の一般的研究・分析」」、「1.4 研究領域を峻別することの重要性」で詳述しているので、まずはその意味を内在的に読み取ったうえでご批判いただきたい。

#### (4) 「地金の流出入」の分析が「抜けている」という批判について

第四に評者は、『資本論』第3部第5篇草稿は「地金の流出入」の分析で締めくくられており、MEGA 研究者の大谷禎之介氏もそのことを明記しているにもかかわらず、拙著の第8章では、「地金の流出入」が抜けているのである。マルクス恐慌論の分析としては、明らかに画竜点睛を欠くと言わざるを得ない」（土井書評 58頁）と述べて拙著を批判されている。しかしこの批判も、拙著の記述を正確に読んでいないことに由来しているといわざるをえない。

第一に、「抜けている」との批判とは真逆に、筆者は恐慌期の「地金の流出入」に高い注意を払い、貨幣資本と貨幣量の分析との関連で次のように書いた。一部を引用しよう。

「本書では、貨幣資本（monied capital）と貨幣量（銀行券量と地金量）との関連につい

ては……端的に次のように答えることができる。第一に、恐慌期において、流通する銀行券量が貨幣資本の需給＝利率に規定的に作用する。恐慌期には、信用の喪失により一部の貨幣が退蔵されるとともに、銀行券に代替し流通していた手形や小切手が信用の収縮によって転換を迫られるため、銀行券量流通の増大が生じうる。この絶対量の増加が恐慌期に利率の上昇に影響を与える。MEGA II/4.2, S. 484-486, 518, 601 を参照せよ。第二に、地金としての貨幣量、その流出入が利率に影響を与える。①地金が流入して、相対的に地金が豊富な停滞期および中位の活気の時期には、利率が低下する（MEGA II/4.2, S. 623-624）。②地金の流出は（主に過剰生産期および恐慌期に）利率を上昇させる。「地金のこの流出は、それが地金（〔これは〕直接に貨幣資本（moneyed Capital）〔であり〕、また貨幣システム（Monetarysystem）全体の土台〔である〕）であるがゆえに、どんな事情のもとでも必ずというわけではないが……地金を輸出する国の金融市場に（だから利率に）直接に作用するであろう。それはまた直接に為替相場にも作用する」（MEGA II/4.2, S. 628-629）。合わせてMEGA II/4.2, S. 624 を参照せよ。つまり、「中央銀行は信用システムの軸点であり、地金準備はこの銀行の軸点」をなし、地金は「銀行の兌換制の保証、かつ、信用システム全体の軸点」（MEGA II/4.2, S. 625）であるがゆえに、その量の変動は利率に直接に影響を与えざるをえない。以上……貨幣量と貨幣資本との関連性についてである」（328-329頁）。

上記の地金の流出入にかかわる、貨幣資本と貨幣量の関連性の把握は、MEGA 研究者のあいだでも見解が分かれる論点である（とくに両

者の関連性について大谷氏は、マルクスは解答を与えていないという見方に立ち、筆者と見解が異なる)。「[地金の流出入]が抜けている」と決めてしまう前に、まずは「地金の流出入」について書いてある拙著の記述を読み取り、先行研究との違いを考慮したうえでご批判いただきたい。

第二に、拙著の第8章「4 銀行信用の限界」と「5 不換制下の銀行信用」では、地金が「信用システム全体の軸点」であり、銀行が地金準備の制約を受けていた兌換制下と、地金準備からの直接の制約を離れて信用を拡張できる不換制下との本質的な差異に着目し、各々のもとの恐慌期の銀行信用の限界を分析している。こ

れは、信用システムの軸点としての地金準備、「地金の流出入」を伴う兌換制がもつ意味を正しく掴んではじめて明らかにできる。具体的な内容については拙著を参照されたいが、当該箇所を読むだけでも、いかに筆者が兌換制と不換制の区別と関連の分析に労力を割いているかわかるだろう。

以上、筆者からのリプライである。あらためて土井氏に心よりお礼を申し上げます。

(宮田惟史著『マルクスの経済理論——MEGA版『資本論』の可能性』岩波書店、2023年2月、xii + 362頁、定価6,000円+税)

(みやた・これふみ 駒澤大学経済学部教授)